

アメリカの大学におけるコメンズメントスピーチ(二)

デイビッド・フォスター・ウォレス、

アーノルド・シュワルツェネッガー、バラク・オバマ

小笠原 はるの

遠藤 昌子

一、コメンズメントスピーチの歴史

アメリカの大学の卒業式では、著名人を招いてのコメンズメントスピーチが一般的となっている。各分野の指導的立場にある人々の中から選ばれたスピーカーが、壇上で名誉博士号を授与され、その返礼として、卒業生にはなむけの言葉を贈る。しかし、それがいっから行われるようになったのかは明らかでない。

アメリカ最古の大学であるハーバード大学が初めて卒業生を送り出したのは、一六四二年九月二十三日だった。卒業式では、卒業する学生に対してコメンズメント・オレイションという名の卒業スピーチが課され、大学教授、同級生、在校生、そして雇用主の前でギリシア語、ラテン語、あるいはヘブライ語を駆使しての演説が行われていた。大学で培った知識や表現力の集大成を示すだけでなく、学生の能力を雇用主が見定める

* 1

小笠原はるの・遠藤昌子「アメリカの大学におけるコメンズメントスピーチ(一)」J・K・ローリングとオブラ・ウィンフリー『比較文化論叢』23号札幌大学文化学部紀要、二〇〇九年

* 2

Samuel Eliot Morison, *Three Centuries of Harvard, 1636-1936*, Cambridge: Harvard University Press, 1936. In Marvin Hightower, "The Spirit & Spectacle of Harvard Commencement."

<http://www commencement.harvard.edu/background/sprit.html> (二〇一〇年一月一〇日取得)

* 3

Charles A. Wagner, *Harvard: Four Centuries and Freedoms*, New York: Dutton, 1950. In "Orations Competition."

http://www commencementoffice.harvard.edu/orations_competition/ (二〇一〇年一月一〇日取得)

機会でもあったという。

また、卒業式の伝統として、卒業する学生たちが費用を負担する形で、祝賀会が開かれている時代もあった。歴史家で、ハーバード大学で教鞭をとっていたサミュエル・エリオット・モリソンは、著書『十七世紀のハーバード大学』で、一六八〇年から一七〇八年にかけてのハーバード大卒業式の祝宴の様子を描いている。そこには、開会の挨拶のあとに、通称「友愛の杯」が列席者に回され、来賓を代表して州知事が乾杯の音頭をとっていたとあり、その際の簡単な祝辞が、コメンスマントスピーチの原点であるという意見がある。

コメンスマントスピーチのスピーカーが名誉学位を授与されるというならわしも、ハーバード大学が最初であったといわれている。一七五三年に、科学者にして政治家、文筆家であり、アメリカンドリームの草分けとして数々の功績を残したベンジャミン・フランクリンがハーバードで名誉学位を授与され、その八十五年後に、十九世紀を代表する思想家、ラルフ・ウォルドー・エマソンが、同じくハーバードのキャンパスに立った。その後も、陸軍軍人で政治家であり、第二次世界大戦で被災した欧州諸国の経済復興計画、マーシャル・プランを提唱したジョージ・C・マーシャルが、一九四七年に、ハーバードから名誉学位を授与され、スピーチを行っている。一九六〇年代に入ると、多くの大学でも、社会的に影響力を持つ人物によるコメンスマントスピーチが行われるようになった。アフリカ系アメリカ人公民権運動の指導者マーティン・ルーサー・キング牧師はその代表者であり、一九六一年にペンシルバニア州リンカーン大学で行ったコメンスマントスピーチは、史上最高の演説の一つといわれている“*I Have A Dream*”（私に

* 4

Randy Howe, *Here We Stand: 600 Inspiring Messages from the World's Best Commencement Addresses*, Guilford: The Lyons Press, 2009, x.

* 5

Samuel Eliot Morison, *Harvard College in the Seventeenth Century*, Cambridge: Harvard University Press, 1936. In Marvin Hightower, "The Spirit & Spectacle of Harvard Commencement,"

<http://www.commencement.harvard.edu/background/spirit.html> (二〇一〇年一月一〇日取得)

http://www.commencement.harvard.edu/background/spirit.html (二〇一〇年一月一〇日取得)

* 6

Samuel F. Batchelder, *Bits of Harvard History*, Cambridge: Harvard University Press, 1924. In Randy Howe, *Here We Stand: 600 Inspiring Messages from the World's Best Commencement Addresses*, Guilford: The Lyons Press, 2009, x.

* 7

Randy Howe, "Here We Stand: 600 Inspiring Messages from the World's Best Commencement Addresses," Guilford: The Lyons Press, 2009, x.

は夢がある)の原型であったことが知られている。

卒業生によるスピーチは、現在もハーバード大学では形を変えて行われている。毎年、卒業していく学生の中から三人が選ばれ、三万人以上の学生と来賓者を前に、まずラテン語、ついで英語によるスピーチが披露されている。時代によっては、学位論文の最終公聴会のためのスピーチと位置づけられたこともあったようだが、近年においては、スピーチの内容は限定されておらず、現代社会における重要課題をはじめ、時事問題、大學生生活で得た教訓など多岐に渡っている。

このように、ハーバードの学生による卒業式のスピーチとして始まったものが、十七世紀になって、ゲストスピーカーによる祝賀スピーチが加わり、後に、社会の指導者によるコメンズメントスピーチへと発展していった。ケンブリッジの小さな街から始まった卒業式のスピーチは、三百五十年という長い道のりを経てアメリカ全土に広がり、今に至っているのである。

本稿では、そのような歴史の一部を担う、現代における三つのコメンズメントスピーチをみていく。二〇〇五年に行われたデイビッド・フォスター・ウォレスのスピーチ、二〇〇九年のアーノルド・シュワルツェネッガーのスピーチ、そして二〇〇八年のパラク・オバマのスピーチである。それぞれのスピーカーの紹介をした上で、スピーチの翻訳を試みる。【小笠原】

* 8 前掲

* 9

"Orations Competition,"
<http://www.commenementoffice.harvard.edu/orations/competition/>
(二〇一〇年一月一〇日取得)

二、デイビッド・フォスター・ウォレスについて

創造の重み

二〇〇八年の秋、アメリカ文学界に衝撃が走った。ポストモダン文学の気鋭作家として、その活躍が認められていたデイビッド・フォスター・ウォレスが自殺したと報道されたのだ。カリフォルニア州クレアモントの自宅で首を吊っていると妻に発見されたという。享年四十六。現代アメリカ文学の旗手の一人とされた作家が、自らの意志で生命を断ち切ったということは、知的活動にたずさわっていた人々たちには衝撃的な事件であった。^{*11}

「息子はもはや治療に耐えきれなかった」取材に応じたウォレスの父親の発言から、ウォレスの精神的苦悩が明らかにになる。ウォレスは二十年来重度のうつ病を患い、入院を繰り返していたのだという。そして、二〇〇七年から、長年服用していた抗うつ剤の副作用に悩まされるようになった。いったん薬をやめると、今度はうつが重症化し、あらゆる治療を試みたが、効果が出ぬまま苦しみ続ける。^{*12}作家にとって、書けないことは死を意味する。そして、その結果の自殺。

人の心の綾を描く作家は、人間の根源的な苦悩をも描くことになる。その苦悩には、種々の広さ、深さがあり、苦悩そのものを哲学的に分析し、核心に迫る。そして、苦悩から救われる設定も多い。それゆえ、多くの読者の共感を得る。悩みながら生きる人の中には、生きることの意味を知るために、人生そのものの本義を知りたいと思う情熱が

* 10

David Lipsky, "The Lost Years & Last Days of David Foster Wallace," *Rollingstone*, October 30, 2008.
http://www.rollingstone.com/news/story/23638511/the_lost_years_-_last_days_of_david_foster_wallace (二〇〇九年十一月十四日取得)

* 11

Jenna Krasjeski, "This is Water," *The New Yorker*, September 22, 2008.
<http://www.newyorker.com/online/blogs/books/2008/09/this-is-water.html> (二〇〇九年十一月十四日取得)

得)

* 12

Bob Thompson, "New Yorker Published Part of Unfinished Wallace Novel," *The Washington Post*, March 2, 2009.
<http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2009/03/01/AR2009030101774.html> (二〇〇九年十一月十四日取得)

わきおこるからだ。カウンセラーが扱えない領域を作家が担っているといってもいい。ウォレスが背負っていたものもその苦悩に通じ、彼の死もまた哲学的な意味を含んでいた。うつの世界は人間精神の一つの極北である。人は何のために生きねばならないのか、生きることにどのような価値があるのか、そのような問いを携えたウォレスが人々を描く。うつ病によって、ウォレスは人間性の深淵を見ることができ、悲哀に満ちた人生を情感豊かに表現することができたのだ。

ウォレスの死が伝えられると、一流の文芸批評欄を持つメディアが自殺の可否を越えてウォレスを理解しようとするコラムを掲載した。「いかに意味ある人生を送るかを読者に示すことこそが、ウォレスが目指していたことだった」ジャーナリストで、エッセイストでもあるD・T・マックスは、文芸誌『ニューヨーカー』でそう述べる。「いい作品というものは、読者が内面において孤独に陥らないように手を差し伸べるものなんだ」ウォレスの言葉を引用しながら、マックスは、ウォレスの作品を「情熱的道德に突き動かされたもの」と捉える。ニューヨーク・タイムズ紙では、全米一の影響力を持つといわれる文芸評論家ミチコ・カクタニが「現代社会が置かれている状況と、その状況における作家の役割をめぐるせめぎ合いが、ウォレスの頭の中に常にあり、ウォレスのほとんどの作品がそれを描いている」と述べた。¹⁴このように、ウォレスの小説には、たえず揺れ動く人間の生き方、そして作家としての自らの生き方への問いが示顕されており、それが、彼の死と重ねあわせて理解されている。

* 13

D.T. Max. "The Unfinished: David Foster Wallace's Struggle to Surpass Infinite Jest", *The New Yorker*, March 9, 2009.

http://www.newyorker.com/reporting/2009/03/09/090309fa_fact_max (二〇〇九年十二月十四日取得)

* 14

Michiko Kakutani. "An Appreciation: Exuberant Riffs on a Land Run Amok," *The New York Times*, September 15, 2008.

<http://www.nytimes.com/2008/09/15/books/15kaku.html> (二〇〇九年十二月十四日取得)

ストーリー・テリング

デイビッド・フォスター・ウォレスは、一九六二年、アメリカのニューヨーク州に生まれた。アマースト大学では論理学・数学を専攻し、二十四歳で『ワイトゲンシュタインの箒』で作家デビューする。大作『*Infinite Jest*』で一躍有名になり、亡くなるまでに六冊の本を発表した。O・ヘンリー賞、ホワイティング賞をはじめとした数々の文学賞を受賞している。日本では、柳瀬尚紀、風間賢二などが早くからウォレスに注目してきた。また、優れた現代アメリカ文学を積極的に紹介している村上春樹も、自身が編んだ英米短篇集『バースデイ・ストーリーズ』（誕生日）をめぐる十一の物語）で、ウォレスの作品を翻訳している。この短篇「永遠に頭上に」は、十三歳の誕生日を迎えた少年が、プールに行つて初めて飛び込み台に向かうまでの心の動きを微細に描写する作品で、そこには、ごくごく短い時間を細部まで書き込み、それだけで作品を成立させてしまふという、卓越した技法が見られる。

ウォレスの作風は、つきつめていえば、ポップなメタフィクションで、物語の中の物語といった展開でストーリーが進んでいく。『ワイトゲンシュタインの箒』では、「箒の本質は、持ち手にあるか先のフサフサした部分にあるのか」という問いかけで遊んでいる。「フサフサしたほう」と答えた人は箒をゴミを掃くものと決めつけているだけで、もし箒がガラスをたたき割るものであるならば、箒の本質は持ち手にあるという。物語に引き込まれそうなユニークな要素が絡み合い、そして結局、何ひとつ謎が解かれないという、結末なき物語は、読む人を選ぶことは間違いない。しかし、そういった物語を好む読者にとって、ウォレスの作品のおもしろさは拔群である。本の帯に「創意工夫に

* 15

David Foster Wallace, Wikipedia, http://en.wikipedia.org/wiki/David_Foster_Wallace (二〇〇九年十二月十四日取得)

* 16

David Foster Wallace, "Forever Overhead," in *Birthday Stories*, trans. Haruki Murakami trans., London: Vintage Books, 2006.
邦訳は「デイビッド・フォスター・ウォレス「永遠に頭上に」」『バースデイ・ストーリーズ』村上春樹編訳、中央公論新社、二〇〇二年

満ちたストーリー・テリングに、アメリカ文学の新しい地平がひらかれた。文章は短めでたみこんでいく。かと思えば、何ページにもわたり続く一文、ナボコフのような美しくも偏執的モノログ、ピンチョンを思わせる多重構造、ヴォネガットのシュールレアリズム、そして不意打ちギャグにあふれたポップな会話」と書かれているが、ウォレスの作品を端的に表したコメントといえよう。¹⁷

コメンズメントスピーチの謎

本稿で取り上げるのは、二〇〇五年五月二十一日にウォレスが行ったケニオンカレッジでのコメンズメントスピーチである。オハイオ州ガンビアにある同大学は、一般教養（リベラルアーツ）を教える小さな大学で、USワールド&レポート誌で「リベラルアーツ大学トップ二十五校」の一つとして紹介されるなど、歴史ある教育機関として高い評価を受けている。映画俳優ポール・ニューマンをはじめ、第十九代大統領ラザフォード・ヘイズ、最高裁首席裁判官を務めたウィリアム・レンキストなど多くの著名人を送り出しており、庄野潤三が留学した大学としても有名である。¹⁸『ケニオン・レビュー』というアメリカ文学界をリードする学術誌を編集・発行していることでも知られ、多くの作家・詩人を輩出している。

ウォレスは、九〇年代の後半から、執筆活動の他にカリフォルニア州のポモナ大学の創作コースでも教えるようになり、後進の育成に力を注いでいた。ケニオンカレッジでのコメンズメントスピーチは、教養教育の意味についての深い考察が、知的ウィットに満ちたウォレス独特の言葉によって展開されるものである。二〇一〇年にタイム誌が選

¹⁷ D・F・ウォレス「ヴァイトゲンシュタインの箒」宮崎専訳、講談社、一九九九年

¹⁸ "Best Colleges 2010," *U.S. News & World Report*, January 10, 2010.
<http://colleges.usnews.rankingsandreviews.com/best-colleges/libarts-counselor-frank> (二〇一〇年一月十一日取得)

¹⁹ "Kenyon College," Wikipedia.
http://en.wikipedia.org/wiki/Kenyon_College (二〇一〇年一月十一日取得)

んだ歴代のコメントスピーチのベストテンで、トップとなっていることから、社会的にも非常に高い評価を受けていることがわかる。^{*20}

しかし、このスピーチには、いまだ多くの謎が隠されている。通常、過去のコメントスピーチは、そのスピーチが行われた大学のホームページに全文が掲載される。特に近年は画像や動画とともに紹介されることが一般的である。しかし、ウォレスのコメントスピーチは、著作権上の問題という理由で、大学のホームページから削除されている。^{*21} ウォール・ストリート・ジャーナル紙は、ウォレスの死の一週間後に文字起こしたスピーチを掲載したが、そのテキストは、部分的に改ざんされていると見なされることが多い。^{*22}

スピーチには、生きることの対極にあるとされる「自殺」とはどのようなことかについて述べている箇所があるが、その部分の描写が異なるヴァージョンがあることがわかっている。これは、何らかの理由で、その描写がウォレスの自殺と結びつく判断されたせいかもされない。また、他の場面でも、テキストによって、言い回しや描写が著しく異なる箇所もあり、実際に話されたスピーチと、あらかじめ書かれていたスピーチ原稿の違いが表れているとも考えられる。ウォレスの死後、二〇〇九年になって、ケニオンカレッジでの卒業式のスピーチは、「*This is Water*」というタイトルで書籍として発刊された^{*23}（写真1）。スピーチのオーディオも同じ販売元から発売される予定である。本稿では、実際に話されたと思われるスピーチのテキストをもとに翻訳を試みることにする。【小笠原】

* 20
"Top 10 Commencement Speeches,"
Time Magazine,
<http://www.time.com/time/specials/packages/completelist/0,29569,1898670,00.html> (二〇一〇年一月十日取得)

* 21
"Kenyon Commencement 2005,"
<http://streaming.kenyon.edu/commencement/2005/> (二〇一〇年一月十日取得)

* 22
"David Foster Wallace on Life and Work," *Wall Street Journal*, September 19, 2008,
<http://online.wsj.com/article/SB122178211966454607.html> (二〇〇九年五月十四日取得)

* 23
David Foster Wallace, *This is Water: Some Thoughts, Delivered on a Significant Occasion, about Living a Compassionate Life*, New York: Little, Brown and Company, 2009

三、デイビッド・フォスター・ウォレス

(二〇〇五年五月二十一日、ケニオンカレッジにて)^{*24}

「水ってなに？」

デイビッド・フォスター・ウォレス

翻訳 遠藤昌子・小笠原はるの

こんにちは、二〇〇五年度ケニオンカレッジ卒業生のみなさん。^{*25 *26 *27}

あるところに二匹の若い魚が一緒に泳いでいた。向こう側からやってきた先輩魚にばったりあって、こういわれる。「おはようさん、水はどうだね？」若い魚たちはしばらく泳いでいたけれど、ついにそのうちの二匹が仲間を見て訊ねた。「水ってなに？」

こんな風な教訓めいた寓話を持ち出すことが、アメリカの大学の卒業スピーチで求められるんだよね。今の話は、この手のものとしては、わりかしまともな方だけど。でも、先輩魚のぼくがきみたち若い魚に水がなんたるものかを教えようとしているとは思わないでくれ。ぼくは先輩なんかじゃない。この魚の例えでいいかかったことは、こういうことなんだ。わかりきったこと、疑いようのないことほど、よく見えなかったり、

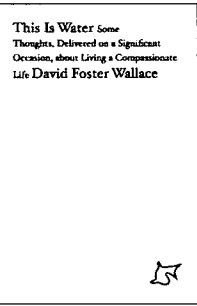


写真1 出版されたコメントスピーチ

* 24

David Foster Wallace, "Real Freedom?," Commencement Address at Kenyon College, Gambier, Ohio, U.S.A., May 21, 2005.

<http://humanity.org/voices/commitments/speeches/index.php?page=foster-wallace.at.kenyon>
(二〇〇九年五月十九日取得)

* 25

ケニオンカレッジのホームページより
<http://www.kenyon.edu/x39085.xml>
(二〇一〇年一月十日取得)

* 26

ケニオンカレッジのホームページより
<http://www.kenyon.edu/x39085.xml>
(二〇一〇年一月十日取得)

言葉にしにくかったりする。社会人として日々、悪戦苦闘していると、こうした気づきが、非常に重要な意味をもつことがある。まあ、そんなことを、この晴れ渡った、素晴らしい朝にいいたかったんだ。

もちろん、卒業式のスピーチで一番望まれるのは、リベラルアート教育について話すことだ。きみたちにこれから授与される学位は、実は意味があるもので、ただの紙切れなんかじゃない。

じゃあ、まずその一番望まれるテーマを考えてみよう。リベラルアート教育は、知識を詰め込むものではなく、考え方を教えるものだってよくいわれるよね。ぼくがきみたかったら、もう聞き飽きたって思うだろうよ。考え方を教えるっていわれたら、なんだか馬鹿にされてるんじゃないかって。いい大学に入学したってことは、考え方を知っているってことだから。でも、リベラルアート教育を馬鹿にしてはいけない。こういうところで何を学ぶか。それは、ただ考えるのではなく、何について考えるかということなんだ。何を考えるかなんて、当たり前すぎて話を聞くのも無駄だと思うんなら、さっきの魚の例えを思い出してほしい。魚にとって水とは何かといったあまりに明らかなことにも疑いをもつ意味を少し考えてみようじゃないか。

教訓めいた話を一つ。人里離れたアラスカの原野に、とあるバーがあった。そこに二人の男がいて、一人は信心深く、もう一人は無神論者で、四杯のビールも手伝って、神がいるかどうかについて、話が盛り上がっていた。無神論者はこういった。「なあ、神様を信じない理由だって、あるっちゃある。俺だって神頼みぐらいしたさ。つい先月のことだけど。飯場から遠く離れたところで、あのひどい吹雪にあっちまった。まったく

* 27

Little, Brown and Company 出版
社のホームページより

[http://www.hachettebookgroup.com/authors/David-Foster-Walace-\(1002928\).htm](http://www.hachettebookgroup.com/authors/David-Foster-Walace-(1002928).htm) (二〇一〇年一月十日取得)



写真4 コメンズメントスピーチをするウォレス



写真2 ケニオンカレッジのパナー



写真3 ケニオンカレッジの卒業式

方向がわからず、先も見えず、しかも零下五十度だ。ものは試し、雪の中でひざまずいて、呼びかけたのさ。『おお、天にまします我らが神よ。』てな。『もし、あなたが本当に神様なら、吹雪で道に迷ったこの哀れな子羊をお助けください。このままだと死んでしまいます』その話を聞いた信心深い男は、無神論者を見た。「じゃあ、もう神様がいてわかったよね。あんたは助かってるんだし」それを聞いて、無神論者は目を丸くした。「いやいや、神様じゃなく、エスキモーがたまたま通りかかって、帰り道を教えてくれただけだ^{*28}」

この話を分析するのは簡単だ。全く同じ経験も、異なる人間にとっては違う意味を持つってね。考え方も、経験も違うから。さまざまな宗教や信念があって当然だ。一つの解釈が正しく、別のが間違っているとは見なさない。

では、ぼくたちの考えや信仰心はどこから来るのだろうか？ どうして違う考えを持つに至ったのだろうか。基本的な世界観や人生観といったものは、身長とか足の大きさみたいに、遺伝で決まるのだろうか。あるいは、言語のように学習によって身につけるものだろうか。自分の関われないところで決まってしまうものなのか。それは、わかっていない。

人は傲慢なもので、自分の考えを正しいと思ひ込む。さきほどの話の無神論者は、エスキモーが通りかかったのは、自分の祈りが神に通じたからだとは全く思っていない。神の存在を認めない人がいる反面、何でもかんでも神様を持ち出す人がいて、そっちの方が無神論者よりもたちが悪い。本当に問題なのは、当たり前前のことを疑ってかかろうとしないことだ。つまり、他の考えがあるとは気付かずに、自分の世界に閉じこもるこ

*28

カナダでは、差別的であるという理由から極北地方に住む人々を「インuit」と呼ぶようになったが、本稿では、アラスカにおいて正式な民族名称である「エスキモー」を使用した。

とだ。

いいたいことは、盲信的にならないこと、自分について、また自分の確信することについて、少しだけ批判的な目で見ること。なぜかって、自分が絶対正しいと思っただけでも、それが間違っていたり、思い違いであることがたくさんあるからだ。ぼくは苦労してやっとわかった。きみたちもそのうちわかるよ。

自分が正しいと思っただけでも、全く違っていることがある。ぼくは自分こそが世界の中心そのもので、リアルで絶対的な存在であると思っただけでも、頭の中では、自分中心は、よくないとわかっている。それでも、みんな自分中心に考えるものなんだ。それは、生まれつき人間に組み込まれている初期設定だからだ。きみたちだって、自分が中心でない経験などしたことがあるかい？　自分が経験する世界は、自分の目の前の世界で、自分の背後や左右にある世界で、自分のテレビに映る世界で、今自分の姿が映っているこのモニター画面にある世界だ。他人の考えや気持ちは、伝えてもらわなければわからないけれど、自分の考えや気持ちは意識せずともわかる。

でも、他人への思いやりとか気遣いをしなきゃいけないといっているわけじゃない。そんなことじゃない。ぼくたちには自分を中心とした初期設定が組み込まれていて、そこから、すべてを眺めて解釈をしている。外の世界を知るには、自分の初期設定を変更したり、解除したりする必要がある。初期設定の変更によって、人生が豊かになるからだ。

アカデミックな環境では、知識や知性が養われるが、そんなことでは初期設定は変更されない。変更するには、目の前で起きていることや、自分がどう感じているかといっ

たことを意識しなければいけない。かなりやっかいな問題だ。ぼくもそうだったけど、何でもかんでも頭で理解しようとして、理屈っぽく考えてしまいがちだ。

目の前のことや自分の感情を把握することは難しい。頭の中だけで、自分と対話していると、自分しか見えなくなる。ぼくも卒業して二十年経ってみて、考える方法を学ぶということは、実はとても深く重たい意味を持つとわかった。つまり、考え方を学ぶことは、何を考えているか、どう考えているかに気付くことだ。何に注目し、経験したことをどう解釈するかについて、意識し、自覚するということができなかったら、社会生活が送れないね。

こんな言葉を聞いたことがあるだろうか。「頭に使われるな、頭を使え」

平凡でばつとしない言葉だけど、実は恐ろしいくらいほんとのことなんだ。ピストル自殺をする人の多くが銃口を向けるのは、頭だ。これは偶然じゃない。もうこれ以上、頭に使われたくないからだ。それに、こういった人たちの頭は、実は引き金を引くずっと前から、死んでいるんだ。

そうならないために、リベラルアート教育がある。初期設定のまましていると、頭に支配され、何も考えずに、流されて暮らすことになる。来る日も来る日も、自分中心の世界だ。

もっとわかりやすくいおう。君たち卒業生には、「来る日も来る日も」がいったいどういうことを意味するのかわからないかもしれない。卒業式のスピーチでは、日々の生活が話題になることはないよね。たいくつで、決まりきった日常。ささいな苛立ち。こ

ここにいらっしやる親御さんや年配の方なら思い当たるでしょう。

例えば、ごく普通の大人の一日はこういうもんだ。朝起きて、会社に向かう。八時間から十時間ほどデスクワークをこなすと、退社する頃には疲れきってしまう。とにかく家に帰って、まともな食事にありつきたいだけ。それから一時間ばかりくつろいだら、早めに床に着く。もちろん翌朝また起きて、同じことを繰り返すために。

あ、でも、待てよ。家には食べ物がなかったんだっけ。今週は、仕事がつくて、買い物に行くひまがなかった。仕事の後、車に乗って、スーパーに行く。会社の引け時だと、案の上、ひどいラッシュアワー。店に着くまで思いのほか時間がかかる。やっこのことで店に着いても、同じく食料品を買おうという仕事帰りの客でひどい混みよう。

目がチカチカするような照明と、頭が痛くなるようなBGM、派手な宣伝がいっぱいの店内は、いるだけで苦痛なのに、すぐに出ることもままならない。人工的な光の下、巨大な店内を棚から棚へと歩き、買いたいものを見つけない。疲れて家路を急ぐ人々をかきわけて、カートを押していかなくちやならない（というふうには、買物は続くけど、これはながい儀式だから、こちらへんまでとしておくよ）そしてやっこのことで、夕食の食材をカートに入れるも、混雑時にも関わらず開いているレジが少ないときた。おかげでレジ前には信じられないほどの長い列。ばかばかしくてやってられない。

でも、次々に客をこなしているレジ係の女性にいららをぶつけるわけにはいかない。退屈で、つまらない仕事を、長時間シフトで繰り返しているんだから。このような素晴らしい大学にいるきみたちには想像できないだろうけど。

とにかく、やっとレジまでたどりついて、支払いを済ませる。そこで返ってくるのは「どうも」という暗い声。破れそうに薄いビニール袋に食料品を詰め込んで、カートに乗せる。車輪の一つが変形していて、勝手に左に進んでいってしまう。それでもここでゴミが散らばった駐車場の混雑の中をどうにかこうにかガタガタ進み、自分の車にたどり着く。帰りの道はラッシュアワーで、どでかいSUVだらけ。のろのろとしか進まない。

もちろん、そんな経験はみんなあるだろうよ。ただ、学生だったら、それが毎日ってわけじゃない。でも、社会に出ると、それが毎日、毎週、毎月、毎年繰り返されるんだ。そればかりじゃない。他にも、単調で、つまらない用事をこなさなければいけない。

ここでいいなのは、こういうことだ。些細なことであんなに嫌なときは、自分の考え方を意識する必要がある。だって、交通渋滞や混雑したスーパーやレジ前の長い列にいるときには考える時間だけはあるからね。何をどう考えるのかを意識していないと、買い物するたびに、うんざりしてみじめな気持ちになる。なぜって、初期設定のままだと、自分中心の見方しかできない。腹が減って、疲れ果てて、とにかく家に帰りたいのに、世界中のやつらがそうさせまいとする。おまえら何者だっていうんだ？ どうして胸くそ悪いやつらばかりなんだ。どうして、馬鹿みたいにどんくさくて、死んだような眼で、ゾンビのようにレジに並んでいるんだ。最低なのは、携帯でわめきちらしているやつだ。なんでぼくがこんな目にあわないといけないんだよ。

自分がエコにこだわっていたりすると、ラッシュアワーでもいららする。車線を塞ぐしか能のないばかりでかいSUVやハマー、ガソリンをめちゃくちゃ無駄遣いする巨大

なピックアップアップトラックが、目につくからだ。そんな車に限って、愛国心や信仰心をこれ見よがしに見せつけるステイッカーをバンパーに張っていたりする。自分のことしか考えないやつのはしそうなことだ。そんなやつらは子供や孫に軽蔑されてもしかたないだろうね。だって、将来に残すべきエネルギーをこんなに無駄にしてるんだから。地球温暖化の元凶だ。実に馬鹿だったで、甘ったれの、むかつく存在。物欲の塊め。

混んだスーパーや運転中に、そうやって考えてしまうのは、しかたないかもしれない。初期設定では、そう考えてしまいがちだ。毎日がつまらなく、思い通りにならなくいららするの、無意識のうちに自分がこの世の中心だと考えているからだ。自分のしたことや感情が、優先されるべきだと思ってしまうんだ。

でも、ラッシュアワーの状況を全く違う角度から見ることだってできる。渋滞で身動きの取れない道路で、目の前で空ぶかししている邪魔な車。でもこのどでかいSUVの運転者は、昔、ひどい交通事故にあって、運転恐怖症になり、ふたたびハンドルを握る気持ちになるためには、頑丈な大型SUVを買うべきだとセラピーでアドバイスされたのかもしれない。それに、ついさっき割り込んできたハマーの助手席には怪我か病気の子供が乗っていて、父親が病院へ向かっているのかもしれない。そうだったら、彼の方がぼくより急ぐのはしごく当然で、邪魔なのは、ぼくの方だろう。

あるいは、さっきのスーパーの状況をこういうふう考えることだってできる。みんなもぼくと同じように疲れて、レジに並んでイライラしている。中にはぼくよりもっと辛く大変な毎日を送っている人もいるかもしれない。

念のためにいうけど、お説教をしようとは思わないでくれよ。ぼくと同じ

ように考えた方がいいとは思っていないし、見方を変えるには、強い意志と努力が必要で、ぼくには、そんなふうには考えられない日も、そんなことを思い煩いたくない日もある。だれだってそうだろう。

でも、意識すれば、見方を変えることができる。例えば、疲れた眼をした厚化粧の太めの女性。レジの列で、自分の子供に金切り声をあげている。彼女は、いつもはこんな風じゃないかもしれない。実は、骨癌で死にそうな夫の手をにぎりしめて、三日三晩、寝ずの看病をしていたのかもしれない。あるいは、運転免許センターで働いていて、雀の涙ほどの給料をもらっている。そして彼女こそ、つい昨日、きみたちの家族が、おっそろしく煩雑な手続きに困り果てているときに、親切にやり方を教えてくれた人かもしれない。もちろん、でまかせで言ってみただけけど、全くあり得ないことでもないよね。考え方次第なんだ。ぼくもそうだけど、初期設定のままだと、自分の考えが正しいと思ひ込みがちだ。自分にとって都合の悪いこととか、嫌な思いをさせられそうなことは、考えないようにする。でも、意識すれば、別の見方ができるようになる。暑くて地獄の釜茹みたいいなスーパーで、窒息しそうな人ごみをかき分けて買い物をする時も、貴重な、聖なる体験だと思えてくる。そこで感じられるのは、星が産声を上げるときのような、心の奥深くに沸き起こる愛、友情、そして不思議な一体感。

そういう文学的な捉え方がいいというわけじゃないけど、この世で一番大切なのは、物事をどう見るかは自分次第だ、ということ。そのために、教育を受けて、初期設定を変更するんだ。何に意味を見いだすかを意識して考えるということだ。何を大切だと思うかを自分で決めるんだ。

ぼくたちには気付かずに行っていることがある。日々の暮らしを送っているうちに、何かを信じたくなるということだ。誰もが何かを崇めだす。何かにすがらないではいられない。自分で決められるのは、何を信じるかということだけだ。何かにすがるとしたら、神様やスピリチュアルなものを選んだ方がいい。キリストでも、アラールでも、エホバの証人でも、女神様でも、原始仏教でも、哲学でも何でもいいんだ。それ以外のものを信仰したら、生き地獄を味わうからだ。お金やモノを崇拜し、それを生きる価値だと思わしてしまふと、どれだけあつても、もっと求めるし、十分だと思えない。そうなんだ。外見の良さや性的魅力を崇拜してしまふと、自分の容姿が醜く思える。年とつて、外見が衰えると、死を迎える前に、百万回も死ぬ。

何を大切だと思ふかで、人生が決まる。こういうことは、神話、ことわざ、慣用句、寓話に共通のメッセージだ。大切なのは、日々、生きるうえで、それを意識していくことなんだよ。

権力を信じてしまふと、自分の弱さを怖れ、権力を奪われることを怖れるあまり、もっと権力を求める。知能や知識ばかり追い求めると、自分が愚かな似非インテリなのが、いつ発覚するかと、びくつく。何かを崇拜することは、悪いことでも罪なことでもない。それがよくないのは、初期設定のまま、無意識にやってしまうからだ。毎日、気づかないうちに、何に価値を置くかを決めているんだ。

社会生活を送る上では、初期設定のまま暮らす方が楽なんだ。恐怖や怒り、失望や欲望、自己崇拜の渦巻く世の中では、人間とお金と権力は仲良しこよし。こういうった考えが、現在の社会に、裕福で、驚くほど快適な暮らしと個人の自由をもたらしたんだ。

ちっちゃなおつむの王国の王様をきどり、万物の中心と信じこむ。そういう風に考える自由はいいけどさ。違った見方をする自由だってあるんだ。世間では何が欲しいか、何を成し遂げたか、何を持っているかが話題になるけど、もっと大切なものについては話さない。本当に大切な自由というのは、日々の暮らしにおいて、他人に配慮して、自分を節するということ。些細な、どうっていいことのない場面で、自分を犠牲にして、他人を氣遣うことができるかということだ。

それが真の自由というものさ。それが教育を受けて、考え方を学ぶと、得られるものなんだ。学んでいないと、初期設定のまま、自分の考え方を振り返らない。考える自由には気が付かないまま、競争社会に生きることになってしまう。

こういうたぐいの話は卒業式のスピーチらしくないよね。面白くもないし、盛り上がりがないよな。でも、シンプルな言い方でいいきっちゃえば、考える自由なんだ。意識して考えてみることもだ。道徳とか、宗教とか、哲学とか、死後の世界みたいな、大きなことを言っているんじゃないんだ。偉い先生のお説教じゃないんで、耳を塞がないでほしい。本当に大切なのは、死ぬまで、どう考えて生きるかっていうことなんだ。

それが、本当の教育の意味なんだよ。知識よりも重要なのは、自分の考え方を意識することだ。当たり前に見えることでも、他の見方があると、自分に言い聞かせないといけないんだ。「水ってなに」「水ってなに？」と疑問を持つこと。

日々、こういう風に意識して暮らすのは、難しいことだよ。学びは一生続くもの。よくいわれるけど、まさにその通りだと思う。卒業はその始まり。幸運を祈るよ！

四、アーノルド・シュワルツェネッガーについて

次にアーノルド・シュワルツェネッガーのスピーチを翻訳するにあたって彼の経歴を紹介する。

アメリカンドリームを抱いて

シュワルツェネッガーは一九四七年にオーストリアのグラーツ郊外で生まれた。父親は元ナチス隊員の警察官で、二人の息子を厳しくしつけた^{*29}（写真5）。そのような子供時代をシュワルツェネッガーはこう語っている。^{*30}

髪の毛を引っ張られ、ベルトでたたかれた。でもどこの家の子供もおんなじようなものだった。みんな親に殴られていた。当時のオーストリアではそれが当たり前だった。そうやって、親の言う事を聞く子供にするんだ。個性ある人間を育てようなんてんじゃない。親の言う事を聞く子供が良い子供だった。自分は親の言うことは聞かなかったし、自分の意地を通して、親に刃向かっていた。そして、しかられたり、叩かれたりするたびに思っていた。もうすぐこんな場所とは、おさらばだ。金持ちになってみせる。有名になってやる。

子供の頃彼は、ハリウッド映画に出てくるボディビルダーの姿に憧れていて、ボディ



写真5 子供時代のシュワツェネッガー

* 29

アーノルド・シュワルツェネッガーの公式ホームページより
<http://www.schwarzenegger.com/en/life/index.asp?sec=life>

(二〇一〇年一月十一日取得)

* 30

Betsy Morris, "Arnold Power,"
Fortune, August, 2004, p.38.

ビルの最高タイトルの一つであるミスター・ユニバース大会で優勝して、アメリカで活躍しようと考えた。「アメリカのものみんな新しくしてしかも大きい。身体のカイ自分は特大サイズのアメリカがピッタリだ。」^{*31} そういって、十四歳のころにはボディビルの訓練を始めたのだった。自宅の壁には自分のヒーローたちのポスターを貼り、地下室で黙々と筋トレに励んだのだった。周囲が驚くほど熱心にボディビルの訓練を続け、彼は、十七歳でボディビル大会に初出場した。

シュワルツェネッガーは目標に向かって努力を惜しまない。それは彼の言葉からわかる。「ゴールを決め、ゴールをはっきりと脳裏に刻み、やる気を起こす、がむしゃらにやる。そして実現させる。野心やはっきりとした将来のビジョンがあったら、それに向かつて進んでいくのは楽しい。だから、どんなに厳しくても、がんばるし、いやではないし、暗い気持ちにもならない。」^{*32} そういう彼のボディビルへの熱中ぶりを語るエピソードがある。十八歳のときに、ボディビル大会への出場を強く希望したが、当時は兵役についていたために、軍規に従うと出場は無理であった。しかし、どうしても出場しなかった彼は、軍服のまま兵舎の塀を乗り越えて逃げ出し、ドイツで行われた大会に出場した。そして、その大会で優勝した彼は、意気揚々と元の兵舎に戻ったのだが、塀を乗り越えて中に入ったところを捕らえられてしまった。そして脱走罪で一週間投獄され、食事もほとんど与えられなかった。しかし、それは彼にとっては全く苦にはならず、ボディビル大会で優勝できるなら、たとえ長期間投獄されても我慢できると思っただどだった。確かにこの大会に参加することによって、彼はボディビル界の知己を多く得、将来への道が開けたのであった。

* 31
Nigel Andrews, *True Myths: The Life and Times of Arnold Schwarzenegger, from Pumping Iron to Governor of California*, New York: Bloomsbury, 1995, p. 21.

* 32 前掲、p. 23.

一九六六年には広い世界を求めてロンドンにわたり、憧れだったミスター・ユニバーズ大会に出場したのだった。この大会で二位に入賞したことで有能なコーチの知遇を得て、翌年には史上最年少で優勝するなどして、多くのボディビル大会でタイトルを獲得した。^{*33}そして、ついにアメリカに渡る機会を手にしたのだった。

アメリカンドリームの実現へ

一九六八年に二十一歳でアメリカに渡った時にシュワルツェネッガーは「前世でここに住んでいたに違いない。アメリカは我が家のように思える。」^{*34}とすぐにアメリカの生活にとけこんでいった。しかし、アメリカのボディビル大会ではなかなか優勝できず、挫折感を抱き、厳しい訓練を自分に課す日が続いた。ある時、車の運転練習中に事故を起こし、ギアレバーが折れて、彼の足に突き刺さってしまった。それだけの傷を負ったら、普通は一週間は身動きできない所だが、彼は治療が終わるとすぐに、普段と変わらぬ訓練をした。^{*35}

ボディビルで成績不振であったこの頃に、映画『超人ヘラクレス』に出演している。当時、彼はまだほとんど英語を話せなかったが、英語の勉強や発音矯正に熱心に取り組んで撮影に臨んだのであった。しかし、彼には強いドイツ訛があったためにセリフは、平板なアメリカ人の声で吹き替えられてしまった。そんなこともあって、この映画への出演は彼にとっては苦い経験として残り、後年には、この映画の上映を阻止するためにネガを買い取ろうとしたこともあった。^{*36}やがて、アメリカのボディビル大会でも優勝するようになり、知名度も上がり収入も増えたのでビジネスにも手を広げ始めた(写真6)。

* 33
The Times, October 2, 2003. (ミスター・ユニバーズ大会では二十歳で初優勝、計五回優勝、また、ミスター・ユニバーズの優勝者だけが参加できるミスターオリンピアでも優勝)

* 34
True Myths, p.32.

* 35
前掲, p.35.

* 36
前掲, p.37.

* 37
アーノルド・シュワルツェネッガー
公式ホームページより
<http://www.schwarzenegger.com/an/athlete/mreverything/index.asp?see=athlete&subsc=mreverything> (二〇〇一年一月十一日取得)

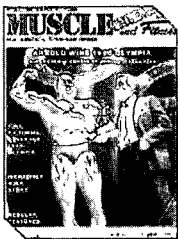


写真6 1980年ミスター
オリンピアで優勝

同時にシュワルツェネッガーは大学教育も受け始める。はじめはビザの関係もあって、多くのクラスを履修することはできなかったものの、ビジネスやアメリカ史、アメリカンインディアン史などを学び、一九七九年には、ついにウィスコンシン大学から学士号を取得した。^{*38}

彼が映画の仕事を始めた頃は、アクション映画の超大作が多く作られる時代になってきた。そして、彼も多くの作品に恵まれ、『ターミネーター』シリーズなどのアクションものを中心にデビュー以来、三十作品以上に出演している。映画俳優としてアメリカだけではなく世界的な人気を持ち、日本もたびたび訪問している。一九九五年に、パスポートを所持せず来日し在留のための特別許可が出されたことがあった。そのときに書かれた始末書を、当時の法務大臣が私的に保管していたとして国会で問題になり、大臣が辞任に追い込まれたことがあり、彼の日本での人気を物語るエピソードとして話題になった。^{*39}

彼はアクション俳優として活躍し、一九八〇年代の終わりごろになると広い年齢層に支持されるコメディに出演し始めた。年齢的にアクションスターとしては限界が見え始めたことと、次に目指した政治活動への布石としてイメージの変化を図ったといわれる^{*40}（写真7）。

さらなるアメリカンドリーム

時間をさかのぼって一九六八年、シュワルツェネッガーが渡米した当時はニクソン対ハンフリーの大統領選挙がおこなわれていた。ニクソンが演説の中で、小さな政府、自由経済、軍隊増強を訴えるのを聞いてシュワルツェネッガーは共和党支持となった。一

* 38

True Myths, p.40, "Profile: Arnold Schwarzenegger", BBC News, August, 31, 2004.

<http://news.bbc.co.uk/1/1/15551155.stm>
(二〇〇一年一月十一日取得)

* 39

参議院質問主意書平成十一年五月二十一日参議院ホームページ
<http://www.sangin.go.jp/japanese/foho/koushi/syuisyo/145/fouh/t145017.htm> (二〇一〇年一月十一日取得)



写真7 「ターミネーター」
1984年

* 40

MGM映画会社、映画「ターミネーター」サイトより
http://www.mgm.com/title_title.php?title_star='TERMINATOR' (二〇一〇年一月十一日取得)

九八三年にはアメリカ国籍を取得し、一九八七年には十年の交際を経てジョン・F・ケネディ元大統領の姪マリア・シユライバーと結婚した。一九九〇年ごろから政界進出に意欲を見せ始め、ブッシュ政権下では青少年の体育プログラムを担当した。^{*41}二〇〇一年にカリフォルニア知事選に立候補する意欲を見せたが、彼自身の過去の薬物・ステロイド使用、女性への性的嫌がらせ、人種やナチスに関連する問題的言動などが指摘されたことで立候補を断念している。^{*42}しかし、その後多くの障害を乗り越えて二〇〇三年にカリフォルニア知事選に立候補したのだった。

この知事選には、百三十五名という多数の候補者が乱立した。候補者が多かったこと、前知事の罷免が選挙公示直前まで決定せずに選挙運動期間が短かったことなどで、各候補の掲げる政策よりも、候補者のイメージや知名度が先行する選挙であった。選挙戦の序盤には、民主党の勢力が強いカリフォルニアでは、共和党のシユワルツェネッガーは不利であると思われた。前知事は、カリフォルニアと発音できないシユワルツェネッガーが知事に適格とは思わないと発言し、マスコミはアクション映画のイメージの強い彼が立候補した事をさかんに揶揄した。

しかし、選挙期間中に、「シユワルツェネッガーブーム」が起きたこともあって、投票率が大きく伸び、多くの浮動票をシユワルツェネッガーが獲得した結果、彼が圧勝したのであった。^{*43}(写真8)。

この選挙は、選挙のエンターテインメント化の顕在例として、マスコミに「サーカス選挙」と報じられた。^{*44}このような傾向を憂慮する声も多く、選挙直後に行われたニューズウィーク誌の世論調査では、政治経験のない有名人が政治に関与するのは国のために

* 41

The After School All Stars Program (シユワルツェネッガーはブッシュ大統領の要請で一九九〇年から九三年に体育スポーツ委員会会長として放課後体育教育プログラムを推進した) http://www.schwarzenegger.com/an/activist/innercity/activist_innercity_eng_legacy_381.asp?sec=activist&subsec=innercity (二〇一〇年一月十一日取得)

* 42

Julien Borger And Duncan Campbell, "The Governor", *The Guardian*, August 8, 2003. <http://www.guardian.co.uk/film/2003/aug/08/usa.politiciansandhearts/print> (二〇一〇年一月十一日取得)

* 43

カリフォルニア知事公式ウェブサイトに
トヨリ

<http://gov.ca.gov/photos/7982/>
(二〇一〇年一月十一日取得)

* 44

日本経済新聞、二〇〇三年十月八日

悪いとの回答は過半数を超えていた。^{*45}

しかし、知事に就任してからシュワルツェネッガーは、破綻寸前の州財政に大胆な改善策をとった。そして、環境を重視した政策を打ち出したり、ゲイの結婚を支持したり、中絶を容認するなど、リベラルな政策を取ったことで、支持率を保ち、二〇〇六年には知事に再選された。知事の任期は二期までであることから任期後のシュワルツェネッガーの政治活動の場が注目されている。

本スピーチは、シュワルツェネッガーの娘が通う南カリフォルニア大学で二〇〇九年に行われたものである。南カリフォルニア大学は一八八〇年にロサンゼルスに創設された西海岸最古の私立総合大学であり、映画芸術学部は全米屈指といわれる。^{*46}【遠藤】

五、アーノルド・シュワルツェネッガーのコメンズメントスピーチ

(二〇〇九年五月十五日 南カリフォルニア大学にて)^{*47}

成功するための六つの法則

アーノルド・シュワルツェネッガー

翻訳 遠藤昌子・小笠原はるの

二〇〇九年度卒業生のみなさん、世界でも有数の大学からの卒業、おめでとう。卒業



写真8 カリフォルニア知事就任式でマリア・シュライバー夫人と共に

* 45

日本経済新聞、二〇〇三年十月十三日

* 46

南カリフォルニア大学ホームページより
<http://www.usc.edu/2010ennn>
(二〇一〇年一月十一日取得)

* 47 前掲

生に盛大な拍手を。今日は大きな節目の特別な日だね。

きみたちをこれまで支えてくれた家族にとっても、今日という日は、特別だろう。むしろ、忘れてならないのは、先生方だ。親身になってきみたちに教え、豊かな知識と見識、経験を、わくわくするような形で、分かち合ってくれた。

そして、サンプル学長からこの素晴らしい学位を授与されたことを感謝したい。ありがとう。なんてたって、アーノルド・シュワルツェネッガーが、人文学博士だよ。最高だね。

もちろん、映画や演劇での博士号でないのは、なぜかなとは思うけれど。でもそんなことはどうでもいいんだ。もらえるものは、もらっとくよ。まあ、今じゃ博士なわけだから、州議会に戻ったら、議員もやっとうことを聞いてくれるかもしれないな。

とにかく、今日は、博士とか知事とかターミネーターとかコナン・ザ・グレートとしてだけじゃなく、「トロイの戦士」と呼ばれる南カリフォルニア大学（USC）の一員として、ここに立っている。

わたしの娘は、ここでちょうど最初の一年を終えたところだ。娘から、この大学がいかに素晴らしい、特別な偉大な伝統があるかを聞いている。

例えば、ヴィクトリー・ベルのこと。お父さん、座ってよと言われて、聞かされたんだよね。ベルは百三十キロもあるの。毎年、USCとUCLAのアメフトの試合があって、勝った方が自分の大学のスクールカラーに塗れるんだよ」わたしは「おいおい、待てよ、キャサリン、あのUCLAのヘボチーム？ そんなら色は変わらないじゃないか」USCでの娘の旅は始まったばかりで、きみたちの旅は終わろうとしている。人生の

次の一幕の始まりにわくわくしながらも、ちょっと不安に思っているかもしれない。大学という心地よい場所を去り、厳しい実社会に出ることが怖いかもしれない。でも、いつておきたい。そんな考えは無用。だって、ここはアメリカなんだ。地球上で最も偉大で、チャンスに恵まれた場所。

もしパキスタンのスワット渓谷やアフガニスタンで生まれ、タリバンに入るか、殺されるか、という状況だったら、別だがね。それなら、確かに怖い。でも、きみたちの場合は大丈夫さ。アメリカにいて、こんな優秀な大学で教育を受けているんだから、将来はバラ色さ。胸がわくわくするね。素晴らしい冒険、そして人生の新たな段階。すごいじゃないか。

もちろん、人生の旅に困難や失敗、失望はつきものだよ。それが人生というものだ。でも、きみたちは準備ができているし、能力もある。そうじゃなかったら、今日ここに座って学位や優等賞をもらっているはずはないからね。

そこで、きみたちが社会人になって役立つように、最高のプレゼントを考えてみた。わたし自身の経験に基づいた成功するためのヒントだ。ご両親は、わたしの言うことが気に入らなかったら、目をつぶり、耳をふさいでいただいで結構。とにかく、わたしがどうやって成功し、今の自分にたどり着いたのか、シュワルツェネッガー博士の成功するための六つの法則を話そう。

実はしょっちゅう「成功への秘訣は何か」って聞かれるので、そんなときは簡単に答えることにしている。「第一にアメリカに来ること。第二に死ぬ気で働くこと。第三にケネディ家と結婚すること」まあ、これは短いバージョンだね。^{*48}（写真9、10、11、12）

* 48

カリフォルニア州知事執務室ホームページより

<http://gov.ca.gov/speech/122323>
（二〇一〇年二月十一日取得）

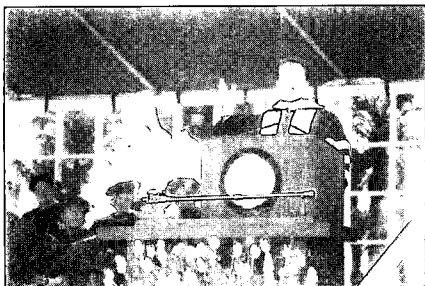


写真11 コメンズメントスピーチをする
シュワルツェネッカー

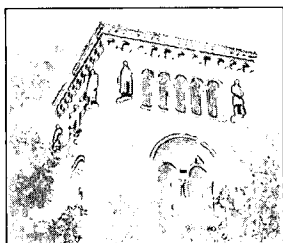


写真9 南カリフォルニア大学の塔

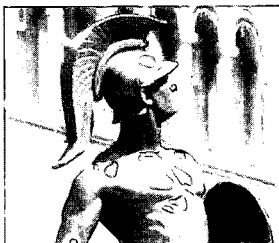


写真10 南カリフォルニア大学の
イメージキャラクター、トロイの
戦士の像



写真12 卒業生とシュワルツェネッカー

では、成功するための六つの法則について話そう。まずいっておきたいのは、これはわたし自身の法則だということだ。きみたちにも当てはまるかもしれないけれど、人はそれぞれ違うから、自分で考えてほしい。人生の過ごし方には、二つある。ゆったりくつろぎながら、楽に暮らしたい人もいるし、ナンバーワンになろうと死にもぐるいで頑張る人もいる。わたしは頑張る方だ。

わたしはいつでも頑張っていて、ナンバーワンになりたいと思ってる。仕事というものを、とても大切に考えてきた。ボディビルを始めたときもそうだった。ただのチャンピオンではなく、史上最高のボディビルダーを目指していた。映画でもそうだった。ただの映画スターでは満足できなく、最高額の出演料がとれるようなビッグな映画スターになって、タイトルよりもデカデカと、シュワルツェネッガー主演作と書かれるようになった。がむしやらに頑張ることで、そして全力を注ぐことで、わたしは成功をつかんだ。

そこで、法則の登場だ。第一の法則は、自分を信じるということ。

若い人は、親とか教師とか周りのみんなから、嫌になるほどアドバイスをもらうけど、本当に大切なのは、自分の気持ちを握り下げて、自分はどんな人物になりたいのかを問いかけることだ。何になりたいかではなくて、どんな人になりたいか？ ということだよ。親や先生の望み通りではなく、自分が望む姿は何か？ 自分が幸せを感じられることを見つけることだ。他の人にとって馬鹿げていると思われてもかまわない。

わたしが子供の頃は、テレビも電話もパソコンもT.V.もなくて、それがよかった。

ツイッターといえは、窓の外の小鳥のさえずり以外の意味はなかった。気が散るようなものなんか何一つなかった。一人で過こす時間がたっぷりあったから、自分の心の声や、頭の中の考えをじっくり聞き取れたんだ。それで、自分の心の奥底には、オーストリアのこの小さな村を離れたいという熱い思いがあることに気づいたんだ。別にオーストリアが嫌だったというわけじゃない。とても美しい国だからね。でも、小さな世界を離れ、何か大きな世界、夢を叶えることができるアメリカという力強い世界の一員になりたいと思った。

あるとき、あこがれのボディビルダー、レグ・パークが雑誌の表紙を飾っているのを見て、アメリカ行きの切符を手に入れる一番の近道は、ボディビルのチャンピオンになることだと思った。レグ・パークはミスター・ユニバースというタイトルのボディビルのチャンピオンで、ヘラクレスものの映画に出演し、強くて、たくましく、自信に満ちあふれていた。レグがどんな風に成功したかで頭の中が一杯になった。それで、両親にこういったんだ。「ボディビルのチャンピオンになりたい。」

両親がどう思ったか、想像できるだろう。彼らは、わたしが父のように警官になるか、ハイジのような人と結婚して、サウンド・オブ・ミュージックのトラップ一家のようににぎやかに子供が走り回る家庭を築いたら、それで十分だった。それが両親の理想だったが、わたしの心の中には、何か別のものが燃えていた。他の人とは違う。わたしにかなれないものになりたい。大きなものになりたいという夢があった。

まわりのみんなは、気が狂ったかと思ったようだ。友人がいった。「スポーツでチャンピオンになりたいんだったら、ここで出来る自転車とか、スキーとか、サッカーにし

たらどう？」でも、耳を貸す気はなかった。自分の願いは、ボディビルのチャンピオンになって、それを足がかりにアメリカに行って、そこから映画界に進み、億万長者になることだった。

わたしは熱心にボディビルに関する本や雑誌を読んだ。さらに、ベッド脇の広い壁一面を、ボディビルダー、レスラーやボクサーたちの写真で埋め尽くした。

その部屋にほればれしたわたしは、母親に部屋を見せた。母はショックのあまり、肩を落として涙を流し始めた。そしてかかりつけのお医者さん呼んだ。「おかしいですわよね」母は医者とともに壁を見つめながら続けた。「わたしの育て方のどこが悪かったのでしょうか？　アーノルドの友だちは、みんな女の子の写真を壁に貼っているのに、この子ときたら、男の写真ばかり。それも、ペビー・オイルを塗りたくった裸の男ばかり。いったいどうしてしまったんでしょう？　どこで間違ったのかしら？」

もう想像できるよね。医者は首を振って、こういった。「何もおかしいことはありませんよ。このくらの歳ならば、ヒーローに憧れるものですから。これは至って普通のことですよ」

そんなわけで、第一の法則。わたしはチャンピオンになりたかった。夢に向かっていった。これが第一の法則、誰がなんと云おうと自分を信じることに。

次に、第二の法則は、前例にとらわれないこと。

人生には何かにつけ、前例がついてまわる。そういった前例には従わなくていい。法律は破れないが、前例なら破っていい。わたしの妻のTシャツにはこう書いてある。

「従順な女性が歴史を動かしたためではない」女性だけでなく、男性にも当てはまることだ。あまりにおとなしく前例に従っていたら、自分らしさが出せなくなってしまう。粹に収まっていけない。わたしはそう信じている。他人に合わせて、面倒を避けていたら、この世に生まれてきた甲斐がない。

わたしは前例に逆らって成功を収めることができた。ボディビルをやめて、映画スターになろうとしたときのことを覚えている。エージェントとの面接でなんていわれたか想像できるだろう。誰もが口をそろえていった。「無理だ、ボディビルのようにはいかない」「きみの身体で？ ムキムキに筋肉がつきすぎて、怪物みたいな巨体だから、映画には向かない。わかっているかもしれないけれど、ヘラクレスものが流行ったのは二十年前だ。今じゃ、小柄な俳優が人気で、ダスティン・ホフマンやウッディ・アレン、ジャック・ニコルソンの時代だよ」もちろん、ジャックが太る前の話だけど。とにかく、そんな俳優が売っていた時代だったから。

それから、わたしの訛りにも難癖をつけた。「そんな訛りで、映画スターになれた俳優は誰もいないね。特にドイツ訛りでは。それに、きみの名前。なんだった？ アーノルド・シュワルツェンシュニツルだったかい？ ははは。いいねえ。そんな名前が看板にあったら、映画の切符はバカスカ大売れ間違いなし！ ってとこかなあ。ははは。」

まあ、こんな風に馬鹿にされたんだ。

親切めかして、こうもいわれたけど。「そうだな、端役ならあるよ。レスラーか用心棒はどうだ。それから、ああ、きみのドイツ訛りなら、『0012捕虜収容所』のナチス将校はどうだい？」

でも、耳を貸さなかった。出来ないと思うのは勝手だけど、わたしは、出来ると思っていた。ボディビル時代のように毎日五時間死にもぐるいでやればいいだけだ。そうして、わたしは早速演技を習い始め、英語、スピーチ、ドラマ、それに発音矯正のクラスまでとった。「ぶっ飛びワイン、葡萄のヴァイン」ドイツ人はFとWとVの音が苦手なんだ。だから、「ぶっ飛びワイン、葡萄のヴァイン」⁴⁹

今でも訛りがとれていないから、授業料を返してもらった方がいいと思われるかもしれない。でも、努力するのは楽しかったし、自分のためになった。

それから、わたしはやっと芽が出て、ルシール・ボールが初めて監督したテレビドラマ『ステイ・ハングリ』でパンピング・アイロン役をした。それから、コナン・ザ・グレートという大役が転がり込んできた。監督いわく「役柄にぴったりの巨漢は、君しかいなかった」その後、『ターミネーター』では「アイ・ウィル・ビー・バック」が映画史上、最も有名なセリフになった。それも、わたしのおかしな訛りのおかげなんだ。そうなんだ。体格も訛りも役立たないと思われていたけれど、仕事をする上では、いつの間にか自分にとっての強みになっていったんだ。きみには出来ないといわれても、それを鵜呑みにしなくてもいいということだ。

それに、知事に立候補したときには、「いきなり知事は無理だから、最初は何か違うことから始めたほうがいい」といわれた。やさしい仕事から始めて、徐々にレベルを上げていくもんだよと。市長からはじめて、州議会議員、それから副知事、最後に州知事をするべきだ、それが、政界でのキャリアの積み方だといわれた。でも、政治家としてのキャリアには興味なんてなかった。だから、わたしは知事に出馬し、そのあとどうなっ

* 49
原文は「A fine wine grows on the vine」

たかは、みなさんも知っている通りだ。

政治家としてのキャリアには興味はないけれども、人々の役には立ちたい。カリフォルニア州の問題を解決して、人々を一致団結させ、政党間の協力関係も築きたいと思った。だから、出馬したんだ。前例に従わなかったけれど、当選することができたんだ。

それとの関連で、第三の法則について話したい。失敗を怖れるな、ということ。

何をするのでも、わたしは失敗を気にしなかった。映画俳優は、台本を読んで、出演を決める。これはいけると思っても、実際に撮影が始まると、面白くない作品もある。

そんな作品はすぐにお蔵入りになる。わたしの出た作品でも、『レッド・ソニア』、『超人ヘラクレス』、『ラスト・アクション・ヒーロー』などは、みんな失敗作だった。でもそれでもいいんだ。というのは、『ターミネーター』や『コナン・ザ・グレート』、『トゥルー・ライズ』や『プレデター』、『ツインズ』などのヒット作もあったからだ。

いつも成功できるわけではないけれど、挑戦を怖れてはいけない。失敗を怖れて、身動きが取れなくなったり、先に進めなくなってしまうてはいけない。自分を、そして自分のビジョンを信じ、正しいことをするのだと信じて、自分を前に押し進めれば、成功はやってくるんだ。だから、失敗を怖れてはいけない。

次には第四の法則。ネガティブな言葉は無視しろ。

そんなことは出来ないとか、これは無理とか、前例がないから、と嫌になるほどいわれることがある。それは無理だよといわれて、ビル・ゲイツがあきらめていたら、どう

なっていただろう。

そんなことは無理だとよくいわれる。実は、まだ誰もやったことがないと聞くと、わたしはぞくぞくする。なぜかというと、自分が出来れば、初めてそれが出来た人になるからだ。だから、出来ないという言葉は無視しよう。

わたしの義理の母、ユニス・ケネディ・シュライバーが、一九六八年に知的障害者のスポーツ大会「スペシャルオリンピック」を始めた際に、うまくいかないだろうと叩かれた。精神障害や知的障害の専門家は「無理だろう。施設から連れ出すなんて。ジャンプとか、水泳とか、トラック競技とか、スポーツに参加させるのは無茶だ。怪我をしたり、他人を傷つけたり、溺れたりするだろう」

でも、ご存知のように、それから四十年たって、今ではスペシャルオリンピックは、百六十四カ国に支部がある、知的障害者のための世界有数の組織となった。義母は出来ないといわれたからといって、やめたりはしなかった。

同じことが、バラク・オバマにもいえる。もし彼が無理だという言葉を鵜呑みにしていたら、どうなったか。ネガティブな人のいうことを受け入れていたら、大統領に立候補していなかっただろう。当選は無理だ、ヒラリー・クリントンを負かすことはできないし、本選挙でも勝てない、とみんながいった。でも、彼は自分の心に従って、「出来ない」という声に屈しなかった。そうやって、アメリカの歴史の流れを変えたんだ。

そんな例はどこにもある。もし、無理だと言われて、あきらめていたら、わたしはいまだにオーストリアのアルプスでヨーデルを歌っていただろう。アメリカに来ることもなく、マリア・シュライバーという素晴らしい女性にも出会わず、四人のかわいい子

供にも恵まれず、『ターミネーター』にも出演していなかった。そして、今日、世界で最も偉大な国の偉大な州の知事として、ここに立つこともなかっただろう。だから、わたしは無理といわれても、無視する。いっだって、自分の心の声を聞いて、自分にいい聞かせる。「おまえは、できるんだ」

それでは、第五の法則に移ろう。一番大切な法則だ。やるからには、がむしゃらにやる。

がむしゃらにやらなかったことが理由で、失敗するのはだれだって嫌だ。十分努力をしなかったという理由で、競技や選挙で負けたくない。あらゆる努力を惜しまないというのがわたしの信条だ。わたしにとっての偉大なるヒーロー、モハメド・アリは七〇年代に名ゼリフを残した。「腹筋を何回やるか」と訊かれた彼は、こう答えた。「数えたことはないね。きついなと感じたときから、数え始めるから。きつくなってから、腹筋運動の効果があらわれるんだ」だから、彼はチャンピオンになれた。

これはすべてに当てはまる。苦労なくして、得られるものはない。スポーツから人生に役立つことをたくさん学んだけれど、特にアリの言葉は胸に響いた。人生のレッスンをわたしはスポーツから学んだ。特にボディビルからだ。人生を楽しむことも大切だけれど、自分が浮かれ騒いで、遊び回っているときに、一生懸命頑張っている人がいて、そういう人が力をつけ、勝ち組になることを忘れてはいけない。

楽して人生を送りたいなら、私の法則は気に留めなくてもいい。でも、人生の勝者になりたかったら、努力するしかない。わたしの法則は、どれもやらない限りは、成功に

結びつかない。

一日は二十四時間あるよね。六時間寝て、残りは十八時間。でも、ちょっと待ってくれ、ぼくは八時間から九時間寝るんだ、という人がいるかもしれない。まあ、そういうときは、倍速で寝ることだね。だって、六時間あれば睡眠として十分だし、それで十八時間が使えることになる。事実、あの有名なビジネスマンのエド・ターナーだっていつもいっていたんだ。「早寝早起き、がっちり仕事。あとは売り込み」

もちろん、こういったことはみんなが知っていることだ。そうじゃなければ、今日ここで卒業式を迎えることもないだろう。とにかく覚えておいてほしい。「ズボンのポケットに手突っ込んだままでは、成功の梯子は登れない」

いよいよ第六の法則。人のために尽くすこと。これはとても大切な法則だ。

どんな道を歩もうと、時間を割いて、社会に対してお返ししなければならぬ。コミュニケーションや、州や国に対してだ。わたしの義理の父、サージェント・シユライバーは、平和部隊、職業訓練、貧困層への公的支援を始めた立派な人だった——彼は、イェール大学での卒業式でこういった。「鏡を壊すんだ。きみたちが自分ばかりみているその鏡を。それでやっときみたちは、鏡の向こうで、たくさんの人々がきみたちの助けを必要としていることに気づくことができる」

いいかい。わたしが一番満足を得られるのは人々に助けの手を差し伸べることなんだ。これまで、スペシャルオリンピックスに携わり、学校に放課後プログラムを作り、健康増進を呼びかけてきた。そして今は知事として、スラム地区の八歳の子供とチェスをす

る方が、アカデミー賞候補になったり、映画先行上映会に出席するという華やかなことよりも、ずっと楽しい。

世界に羽ばたこうとしている今、あらためて六つの法則を思い出してほしい。

自分を信じる

前例を破る

失敗を怖れない

ネガティブな言葉は無視する

やるからには、がむしゃらにやる

人のために尽くす

最後にもう一ついいたいことがある。ロサンジェルズがまだ開けたばかりの一八八〇年にこの大学は創立され、それ以来、百二十五年、きみたちの前には、この大学の先輩であるトロイの戦士がいた。^{*50} 今日、きみたちが座っている、まさにその場所に座っていた。いい時も悪い時も、戦争のときも、平和なときも、希望に満ちあふれたときも、不安に満ちたときもだ。その長い間、この偉大なアメリカ、偉大なカリフォルニア、偉大な南カリフォルニア大学は、ゆるぐことなく存在し続けてきた。今、わたしたちは、危機的な状況にいて、世界情勢も不透明だ。

でも、一つだけ確かなことがある。必ず、良い時代にできるんだ。「ウィ・ウィル・ビー・バック」もっと強く豊かになれる。これまでアメリカもカリフォルニアも苦難を乗り越えてきた。古代トロイの戦士は、高い士気と最後まであきらめない粘り強さで、

* 50
USCのイメージキャラクター。写真10を参照のこと。

劣勢を覆す力があつた。卒業生のみなさんも、前向きな気持ちでチャレンジ精神を持ってほしい。ここはアメリカで、きみたちは力強く羽ばたこうとするUSCの誇り高きトロイの戦士だからだ。

卒業おめでとう。幸運を祈る。どうもありがとう。

六、バラク・オバマについて

最後に、バラク・オバマのスピーチを翻訳するにあたって、彼の経歴を紹介する。

多文化の環境で育つ

一九六一年にオバマは、ハワイ大学の学生だった母親と、アフリカからの留学生の父親の間に生まれた。一九六三年にハーバード大学進学のために父親が転居し、母子は母の実家のあるハワイに残り、その翌年に両親は離婚した。一九六七年には母親がインドネシア人留学生と再婚したためにインドネシアに転居し、オバマは六歳から十歳までインドネシアで生活し、この間に異兄妹が誕生した。インドネシアに滞在している間に、彼は現地の生活に馴染み、インドネシアの言葉や習慣や言い伝えを学んだりした。そして、悪霊払い、物乞い、路上生活者などであふれる現地の光景に馴染んでいった。彼は、人間は食べた動物の力をもらえるとと言う義父の言葉に、犬や蛇の肉や炙ったイナゴなどを食べたこともあったという^{*51}^{*52}（写真13）。

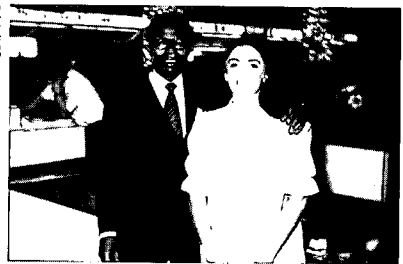


写真13 オバマの両親

* 51
バラク・オバマ『マイ・ドリーム
バラク・オバマ自伝』白倉三紀子・
木内裕也訳、東京、ダイヤモンド
社、二〇〇七年、四十一―四十二頁

* 52
Karen Turnulty, "Endorsement
Politics," *Time Magazine*,
<http://www.time.com/time/magazine/article/0,9171,1708925,00.html>
(二〇一〇年二月十一日取得)

このように異文化の中で冒険に満ちた子供時代を送りながらも、自分の黒い肌の色を初めて意識したのもこの時期だった。アメリカ大使館の図書館で手にした『ライフ』誌の写真を見て衝撃を受けたこともあった。皮膚の色を白くするために化学療法を受け自然に青白くなってしまった黒人男性の写真が載っていたのだ。オバマは幸せになるために白い肌を手に入れたいと願う黒人の存在を知って、表現できない不安感に襲われる。この経験は彼のものの見方を変えさせ、それからはテレビ番組の登場人物や、通信販売カタログのモデルの肌の色が気になり始めたのだった。

アイデンティティーを探して

十歳で、オバマは祖父父母のいるハワイに戻った。まもなく、インドネシア人の夫と離婚した母も、ハワイで一緒に暮らすようになった。祖父父母はアメリカのハートランドといわれる保守的な地域の出身の白人であり、そのような家庭環境で育ったので、オバマにとって身近なのは白人の文化であり、ケニアに住む父親と接することも少なく、黒人の文化を自分のものと感じたことはなかった。しかし、自分の黒い肌のために外の世界では黒人と見なされていた。そのギャップに悩み、自分は白人の世界にも黒人の世界にも属しきれないという深い孤独感を抱いていた。

ある時、その孤独感が深まる出来事があった。その頃、祖母がバス停で何度か知らない人に金をせびられる事件があったが、その相手が白人ではなく黒人だった時の方が、祖母の感じた恐怖が一段と激しいものだったと聞いてしまったのだ。オバマは、祖父父母には黒人の友人もいて、人種差別意識はないはずなのに、その祖父父母でさえ自分と同じ

黒い肌にいわれのない恐怖を感じると知ってしまったのだ⁵³（写真14、写真15）。

ハワイでオバマが通ったプナホウ校は一八四一年創立の名門私立高だったが、オバマはここでは成績も優秀でスポーツでも活躍していた。この学校の幼稚園から高校までの学生数は三七五〇名であるが、黒人学生の数は少なく、オバマの自伝によると、在籍時には彼を含めてわずか四名であったという⁵⁵。

学校では、黒人であるがゆえに差別や嫌がらせをうけることがあった。たとえば、七年生の時にはじめて差別用語の「クーン（黒人）」と呼ばれた屈辱感から相手を殴ってしまった、また別の時に、テニスの選手権試合で、壁に貼られた予定表を見ていたら、黒い肌の色が移るからそれには触るなど言われたことがあった。さらに、自宅アパートのエレベーターに乗りあわせた白人女性にストーカーだと誤解され、管理人に通報された。その後誤解とわかってでも女性は全く謝罪しようとしなかったこともあった。

それゆえこのような経験からオバマは自分のアイデンティティーを探し求めるようになった。彼は、黒人であることを理解しようとして黒人の文学や自伝を読みあさり、マルコムXの思想に強く共感したこともあった。その過程で、黒人として生きたいと願うようになり、世間の黒人男性のイメージに近づこうとし、アルコールを飲んだりマリファナやココインをあえて試したりした。

しかしやがて、自分のアイデンティティーを見つけたのだった。黒人と白人と言う二つの血を引く自分の使命は、二つの人種間の融合を図ることではないかと思うようになったのだ。彼のそのような心情は、次のような言葉で表されている。



写真14 青年期のオバマ



写真15 オバマと祖父母

* 53

“Obama, The College Years,” *Time Magazine*,
<http://www.time.com/time/photo-gallery/0,29307,1866765,1815171,00.html> (二〇一〇年一月十一日取得)

* 54 前掲

* 55

『マイ・ドリーム』 百六十九頁

私は黒人と白人の世界を行ったりきたりすることを学んだ。それぞれの世界にそれぞれの言葉、習慣、文化があることを知っていたし、私が違いを埋める努力をして橋渡ししさえすれば、二つの世界は最終的にひとつになるとどこかで信じていた。^{*56}

* 56
前掲

コミュニティー・オーガナイザーから政界へ

一九八三年にコロンビア大学を卒業するころには、地域における経済や文化の活動を行うコミュニティー・オーガナイザーになりたいと強く願うようになっていた。彼はその仕事を希望した理由をこう語る。

黒人にとってはコミュニティーは最初から存在するものではない。コミュニティーとは自分たちで作り、勝ち取り、花壇のように常に手入れをしなければならぬものだ。人々の夢の大きさに比例してコミュニティーは大きくなる。……中略……私が思い描いている未来のコミュニティーは、黒人も白人も、褐色の肌の人々も、それぞれ新たな形でアメリカという大きなコミュニティーに加わっていけるものになるはずだ。そのコミュニティーの一員になれば最終的には私自身の人生も、ありのままに受け入れられるようになるだろう。それが私の思い描いていたオーガナイザーの仕事だった。^{*57}

* 57
前掲、百六十頁

このように、人種の壁を越えあらゆる人が所属できる場をコミュニティーと位置付けてその創出を目指したのだ。一九八五年にオバマは、シカゴの教会グループのコミュニ

ニティー・オーガナイザーになるが、彼を雇ったジュラルド・ケルマンは、オバマが黒人コミュニティに強く惹かれ、ある意味では意図的にその一部になることを選んだと言う。^{*58}

その後、オバマは一九九一年にハーバードで法務博士号を取得し、一九九二年から二〇〇四年までシカゴ大学法科大学院の講師となる一方、弁護士事務所勤務し、人権派弁護士として頭角を現した。一九九六年から二〇〇四年までイリノイ州議会上院議員を務めた後、二〇〇四年にイリノイ州から上院議員に選出された。当時、黒人の上院議員はオバマ唯一人で、歴代でも三人目であった。二〇〇四年のアメリカ大統領選民主党大会が行われたときにオバマは基調演説を行い、その演説の素晴らしさで民主党員の注目を集めた。特に、多様な人種的背景と異文化環境に自分が育った事に言及した後述へられた次の一節は多くの人の共感を呼ぶことになった。^{*59}

リベラルのアメリカも保守のアメリカもなく、ただアメリカ合衆国がある。ブラックのアメリカもホワイトのアメリカもラティーノのアメリカもなく、ただアメリカ合衆国がある。

この演説によって民主党内でのオバマの認知度が高まり、二〇〇七年にアメリカ大統領選挙民主党候補として立候補した。彼を支援する市民による草の根運動が起き、人々の大統領選挙に寄せる関心の高さは社会現象ともなり、二〇〇八年に彼はアメリカ大統領に選出された。二〇〇九年一月に行われた大統領就任式には、史上最高の二百万人の

* 58 前掲、百六十九頁

* 59

二〇〇四年、民主党大会基調講演
Keynote Address at the 2004 Democratic National Convention, July 27, 2004, Organizing for America, http://www.barackobama.com/2004/07/27/keynote_address_at_the_2004_de.php (二〇一〇年一月十日取得)

* 60

ホワイトハウス・ホームページ
<http://www.whitehouse.gov/photos-and-video/photogallery/december-2009-photo-day> (二〇一〇年一月十一日取得)

* 61

「アメリカ合衆国のポर्टレート要約」
〔米國務省国際情報プログラム局〕
<http://aboutusa.japan.usembassy.gov/j/sasai-society-diversity.html>
(二〇一〇年一月十日取得)

観衆が集まった。それは、彼が黒人初の大統領であったので、市民の関心が高かったからであった^{*60}（写真16）。

しかも、オバマは複数の人種の血を引いていて、そのオバマの大統領就任は、多くのマイナリティーグループにも人種の融合を象徴するものとして歓迎されたのだった。

総計五千万以上、そして現在でも年間七〇万人が海外から移入するアメリカでは、人口構成の多様化が進んでいる^{*61}。例えば、以下のようにオバマにつながる人々をみるだけでもアメリカの人種構成の多様性は浮き彫りになるであろう^{*62}。

* 実父はケニア人

* 実母は白人とネイティブアメリカン

* 義父はインドネシア人

* 異兄妹は白人とネイティブアメリカンとインドネシア人

* 異兄妹の夫は中国系マレーシア人

* 異母弟の妻は中国人

自己の人種的アイデンティティーに苦悩し、その苦悩を乗り越えて、人種の壁のないコミュニティーをつくろうと活動し、人種を超えた融合を訴えて大統領に選出されたオバマにアメリカも世界も希望を抱いたのであった。二〇〇九年にノーベル平和賞が授与されたが、人々によりよい未来への希望を与えた事が受賞理由のひとつとされた^{*63}。



写真16 大統領就任式

* 62

シカゴサンタイムズ紙のホームページより
"Obama's Interactive Family Tree,"
Chicago Suntimes,
http://www.suntimes.com/images/cds/special/family_tree.html
(二〇一〇年一月十日取得)

* 63

「オバマ大統領 ノーベル賞受賞理由全文」二〇〇九年十月九日 朝日新聞コム
<http://www.asahi.com/international/update/1009/TKY200910090393.html>
(二〇一〇年一月十日取得)

オバマは、ジョン・F・ケネディと比較されることが多く、カリスマ性、若さ、演説のうまさなどで、ブラック・ケネディと呼ばれることもある。そして、オバマの大統領選勝利にはケネディ家の支援があった。特に当時上院議員であったテッド・ケネディが、選挙戦の山場を迎えた二〇〇八年一月にオバマ支持を表明したことは大きな追い風となった。本稿で取り上げる卒業スピーチは、東部の名門ウェスリアン大学の卒業式において、脳腫瘍で静養中のケネディ議員の代役として二〇〇八年に行われたものである。本スピーチにはオバマ大統領のアイデンティティに関する苦悩がつぶさに描かれており、それを翻訳することが意義深いと考え、オバマの多くの卒業スピーチから本スピーチを選択したものである。^{*64}【遠藤】

七、バラク・オバマのコメンストスピーチ

(二〇〇八年五月二十五日ウェスリアン大学にて)^{*65}

希望のさざ波を起こせ

バラク・オバマ

翻訳 遠藤昌子・小笠原はるの

ドレックサー教授、ご紹介ありがとうございます。ロス学長、わたしをキャンパスに迎えていただいたことを感謝いたします。ウェスリアン大学での一年目の舵取りを見事

* 64

二〇〇九年にはノートルダム大学、アリゾナ州立大学、米国海軍兵学校で卒業スピーチを行った。また、二〇〇五年にイリノイ州ノックス・カレッジでのスピーチは二〇〇八年に刊行された『アメリカの黒人演説集』（岩波文庫、三二六九―三二六六頁）に日本語訳で収録されている。

* 65

“Remarks of Barack Obama.”
<http://www.wesleyan.edu/newsrel/announcements/rc.2008/obama-speech.html> (二〇一〇年一月十一日取得)

に終えられ、お疲れさまでした。そして、二〇〇八年度卒業生のみなさん、あなたがたの卒業式に出席させていただき光栄です。(写真17)。

今日わたしは、わたしにとっても、この国にとっても、ヒーローであるテッド・ケネディ上院議員の代役に立つというめったにない榮譽にあずかりました。今日はヴィッキー夫人を始め、彼のご家族のみなさんにお会いできて、大変嬉しく思っています。数日前にテッドから電話があり、自宅で静養につとめていると話していました。彼に及びもしないのは承知の上で、喜んで代役を引き受けました。

最初に、テッドからのメッセージをお伝えしたいと思います。「わたしの健康を祈ってくださいている多くの方々から心からお礼を申し上げます。そして、わたしの引退を望んでいるみなさん、まだまだ喜ぶのは早いです」

テッドらしいユーモアのセンスはますます磨きがかかっていますね。彼の持ち前の闘魂で、今回の試練も乗り越えられると信じています。友人であり、大先輩でもあるテッドの回復を祈りましょう。

彼のメッセージは、ロス学長も取り上げていたように普遍的なものです。それは、国のために尽くすということで、まさにケネディ家の人々がこれまで行ってきたことです。テッド・ケネディほど説得力と熱意をもって語ることはだれもできないでしょう。

テッドの兄のジョン・F・ケネディは「国があなたのために何ができるかではなく、あなたが国のために何ができるかを問いかけよう」と国民に呼びかけました。その年にわたしは生まれました。そして、実際に人々が国のために尽くし始めた時期にわたしは成人したのです。

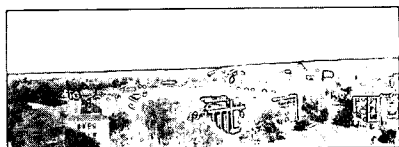


写真17 ウェスリアン大学キャンパス

* 66

ウェスリアン大学ホームページ

<http://www.wesleyan.edu/> (二〇

一〇年一月十一日取得)

アメリカの若者たちが平和部隊のボランティアなど海外で活躍したおかげで、アメリカへの不信感を抱かれそうなきでも、好意的な見方をしてもらうことができました。あなたたちとはそう歳も変わらない、十代の若者や大学生です。彼らは六〇年代の公民権運動の状況をテレビで知りました。デモの参加者に犬がけしかけられ、激しい水流で蹴散らされ、暴力がふるわれる映像です。彼らは家にとどまっていた方が安全だと知りつつも、ともかくバスや車や、あるいは列車に飛び乗って、当時南部で行われていた公民権運動に加わるうとしました。彼らがそうしたからこそ、世界が変わったのです。

今日、なぜこんな話をするかということ、社会には一つの異なる世界があるとされるからです。

その世界の一つは、毎日の出来事や身近なことです。わたしたちは、毎日、仕事や家庭のことに翻弄されがちです。もう一つの世界は、国内外で起きている出来事です。新聞やテレビのトップニュースで目にする世界です。戦争や不景気、飢餓問題や地球温暖化、不正や不公平などの大きな問題です。それは、自分の身の回りの世界とは隔絶されたもので、自分たちの力が及ぶものではないと考えがちです。

しかし、この国の歴史をひもとくと、二つの世界は別なものではないことがわかります。わたしたちの歴史は、あらかじめ書かれていたわけではなく、わたしたちの手によって書かれたものなのです。自分の生活と国家は、切り離せない、重なり合うものだ。そう信じた何世代にも渡る人々の手で書かれてきたのです。そして、二百年以上の長きにわたって、そのような人々が国のために尽くすことで、自分たちの生活も国家もどちらも豊かにしてきましたのです。

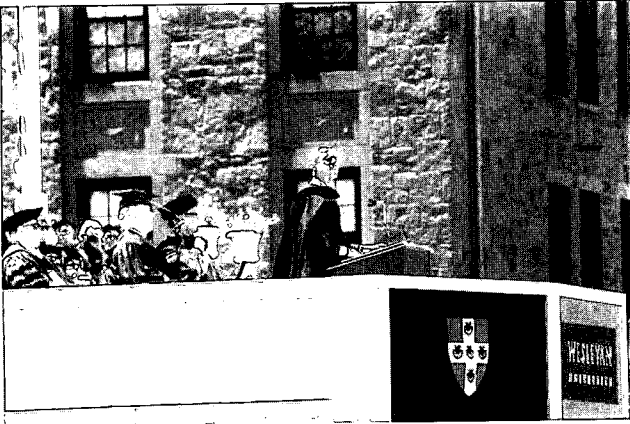


写真18 コメンズメントスピーチをするオバマ



写真19 卒業式に参列するオバマ



写真20 卒業式恒例のキャップ投げ

わたしの場合は、人のために尽くしたことで、自分が救われ、国の役にも立つことができず、できませんでした。

わたしの子供時代は不安定なものでした。二歳のとき、父が母のもとを去りました。母が再婚して、しばらくは海外で暮らし、その後、長いことハワイで、母とカンザスから移住してきた祖父母と一緒に暮らしました。十代の頃はひどい反抗期で、勉強にはほとんど見向きもせず、投げやりに過ごしていました。優秀なみなさんには、想像できないかもしれないですが、自分が何をしたいか、何ができるかもわかっていませんでした。

しかし、大学に入って二年もすると、母の影響だと思いますが、努力すること、正直であること、思いやりを持つことができるようになりました。長い冬眠の後で、心の奥にあったものが、湧き出てきたのかもしれない。あるいは、素晴らしい先生方や良き友人の影響かもしれません。自分の外の世界に目を向けるようになり、南アフリカの人種隔離政策に反対する運動に参加するようになりました。また、貧困や医療問題に関する国内の議論に関心を持つようになりました。

大学を卒業するころには、草の根運動で社会を変えたい、という壮大な考えを抱くようになりました。その一步として、アメリカ中の社会活動団体に手紙を出しました。すると、シカゴのサウスサイドの教会の団体から、鉄工所の閉鎖で打撃を受けたコミュニティのために働かないかと打診されました。母と祖父母は、口では好きにしているといいますが、実はわたしに法科大学院に進んでほしいと願っていることも知っていました。かたや友人がウォール街で就職をしようとしているときに、わたしがその団体に提示されたのは、年俸一万二千ドルと古いポンコツ車を買うための二千ドルだけでした。

それでも、わたしはその仕事をやりたいと思い、引き受けました。

シカゴには誰一人として知り合いませんでした。コミュニティのの仕事がいったいどういうものであるか、全くわかっていませんでした。公民権運動やJFKの国のために尽くそうという呼びかけに胸を高鳴らせて、サウスサイドに来てみれば、デモもなければ、心を高揚させるようなスピーチもありませんでした。閉鎖され、灯りが消された鉄工所の付近では、たくさんの人たちが生活苦に喘いでいました。わたしは、初めはたいしたことができませんでした。

その地域はギャングの犯罪に悩まされていきました。その対応のために、地域の指導的な立場の人々を集めて、話し合いを持つとしました。会場となったホールで、わたしは待ちました。待って、待って、やっと年配の人たちがホールに入ってきて、腰を下ろしました。その中の小柄な女性が手を挙げて訊ねてきました。「ビンゴ大会はここかい？」

たやすいことではありませんでしたが、状況は少しずつ良くなり、地域がまとまってきました。わたしたちは、選挙に参加できるように人々に有権者登録をさせ、放課後プログラムを始め、雇用の創出に奮闘し、人々がまとまな生活ができるようにサポートをしていきました。

しかし、自分がサポートしていただけではなく、自分もサポートされていたのです。わたしは自分を受け入れてくれるコミュニティを見つけ、市民であることの意味、自分が探していた道を見いだしたのです。自分の特異な生い立ちが、もっと大きいアメリカの物語にどのように関わられるかを見いだしたのです。

みなさんそれぞれに、将来、自分のやるべきことを見つけるチャンスがあります。そ

れは自分から求めるもので、人から与えられるものではありません。社会には社会奉仕という必修科目があるわけではないのです。だれも、他人を助けるように強制されたりはしません。卒業証書を手にし、このキャンパスを去ったら、立派な家や高級スーツなど、拝金志向の社会がよしとするものを追い求めることもできます。アメリカという物語に加わることなく、自分の物語の狭い世界に閉じこもることもできます。

しかし、わたしはみなさんにそういう生き方をしてほしくありません。人助けも恩返しも大切だとわたしは思いますが、人に強制されたからやることではありません。自発的な行動であってほしいのです。個人が満たされるには、まず社会が良くなければいけないのです。壮大な目的をもたないと、自分の身近な欲求だけを満たそうとしがちです。自分という枠を超えて初めて、自分の本当の可能性がわかり、アメリカ史の偉大な次章を書くという自分の役割を見いだすのです。

さまざまな方法でアメリカのために尽くすことができます。現在、多くの課題が山積しています。しかし、コミュニティーの役員になる必要もなければ、わたしのように、大統領に立候補するといった極端なことをする必要もありません。この大学でも、地元の学校や慈善団体のユナイテッド・ウェイでボランティアをしている人がたくさんいます。さらに大学では、地域の貧困家庭に生鮮食品を届けるプログラムも始めました。また、二〇〇一年以来、百六十四人の卒業生が平和部隊に参加しました。今年は卒業生の二人が、わたしの父の母国であるケニアの貧しい地域での代替エネルギー源供給活動に参加します。

卒業してからも、社会活動に参加する機会を持ってほしいと思います。この国の将来

はみなさんの将来であり、わたしの将来であり、みなさんの子供たちの将来でもありません。それは、みなさんが築くものなのです。アメリカが安全であり、アメリカの理念が受け入れられるためには、世界の隅々の人々にアメリカに好意を持ってもらわなければなりません。ですから、もっとたくさんのおみなさんに海外に出てほしいのです。わたしが大統領に就任したら、外交を活発にし、平和部隊を倍増し、他の国の若者にも同様の活動への参加を促したいと思います。そして、人類が直面している共通の問題に対して、手と手を取りあって協力していくのです。

万年雪が融け、海面が上昇している現在、みなさんには緑の革命の先頭に立ってほしいのです。気候変動による壊滅的な大打撃を防ぐことはまだ可能です。そのためには、再生可能なエネルギー資源の開発に真剣に取り組まなければなりません。また、長期間に渡ってそのプロジェクトにボランティアで携わる人たちが必要です。エネルギーの節約や汚染地域の浄化も必須です。有能な技術者や科学者を発展途上国に送ることで、その国の経済成長と両立するようなクリーンエネルギーの使用を促すことが大事です。

ボストンの子供が、北京やインドのパンガロールの子供と競わなければならない時代になりました。教育に力を注ぐため、学校の教職員を増やし、功績に応じた報酬を考えるなどの政策をとります。教育者同士が学び合うことも必要ですし、重点校の教育や、数学や科学といった重要教科の指導を強化したいです。そのためにみなさんが必要とされるのです。

ハリケーンカトリナの災害によって、ニューオリンズにはいまだに仮設住宅で一人寂しく夜を過ごさなければならぬ子供たちがいます。もっと多くのおみなさんに、週末

や有給を利用して、町の復興を手伝いに行ってほしいのです。ニューオリンズに行けなくとも、自分の地元のシェルターでボランティアをし、貧困者のための食事支援活動に携わってほしいのです。やるべきことはたくさんあります。貧困家庭を支援する団体の活動に加わったり、政策に共感を覚える政治家を探して、彼らを支援するのです。

みなさんの力が求められています。

戦争には、平和を、不平等には平等を、無力と不信には、信頼を。そのために戦う。それが二〇〇八年度卒業生のみなさんに求められていることです。

これだけはわかってほしいのです。変化を起こせると思っているだけでは、変化は起きない。しっかりと両足を地に着けて、行動を起こさなければ、変化は容易には起きません。

アメリカが直面する重要課題を解決するには、難しい選択をしなければなりません。そのために、困難な現実を認め、個人のみならず、国家も犠牲を払わなければならないのです。

例えば、エネルギー問題を解決する特效薬はありません。どのエネルギー源も一つだけでは不十分なので、今あるエネルギー源をもっと賢く使わなければならないのです。また、根深い貧困問題も、一夜にして解決されるわけではなく、予算と政策の見直しが必要ですが。しかし、現状では、アメリカ政府や州政府の財源が乏しく、政策的にも貧困の改善は困難です。さらに、教育制度を変革していくためには、政府の抜本的改革だけでなく、親と生徒の意識を変えていく必要があります。とはいっても、意識を変えるところというのは難しいことです。海外に目を向けると、アフガニスタンのダルファーでは、住

民の虐殺が起きています。それをやめさせるには、国連のような第三者機関が介入して、現地の困難な状況に対処するべきです。

しかし、みなさんが社会に奉仕することを自らの使命としても、ときには挫折や失敗を経験するでしょう。成功したと思えても、完璧なものではなく、あとで悪い結果を招くことがあります。また、みなさんの友人や家族から、もっと安定した給料を得られる仕事をしよう、強く勧められることもあるでしょう。そんなとき、気持ちが揺れるかも知れません。

しかし、そういうときこそ、思い出してほしいのです。世界を変えたい、という気持ちは愚直なことでも何でもありません。一つの行動が——社会に投じる一石が——ケネディ議員のいう「希望のさざ波」を起こすことに繋がるのです。それが世界を変えるのです。一つの行動。卒業生のみなさんの一人一人の行動です。

ケネディ議員は平和部隊の五周年記念式典の話をよくします。彼はその場で、一人のアメリカ人の若者に志願した理由を訊ねました。「アメリカのために、何かするよう頼まれたのは初めてだったんです」若者はそう答えたのです。

いったいみなさんの中で何人がそのようなことを頼まれたことがあるのかわかりませんが、今、ここでわたしは、みなさんをお願いしているのです。もしわたしが大統領になれたら、そのお願いを何度も繰り返すつもりです。異なる見解や立場があったとしても、社会のために、アメリカ人が結束することができると考えています。大統領になったときは、その結束を自分の使命とするつもりです。そして、みなさんの世代は、意欲もあり、問題を解決できる力も備わっているはずですよ。

それでも、社会活動に対しては、否定的で皮肉な見方をされることがあります。でも、そういうことは、昔からありました。かなり昔のことになります。シカゴでの新しい仕事を始めようとする前、一人の老人と話したことを覚えています。彼はこういいました。「いいかい、バラク、コミュニティーを助けるなんていう仕事はやめた方がいい。もっと金になるようなことをするんだ。世界を変えようなんて無茶な話だ。そんな仕事をして誰も認めてくれない。おまえは声がいいから、テレビのアナウンサーになっただろうかい？ 悪いことはいわない。それなら成功できる」

確かにアナウンサー向きの声かもしれませんが、それ以外は当てはまりませんでした。彼はわたしが見たものを見ていないのです。地域の人たちが空き地を清掃し、子供の遊び場を作ったとき、どんなに嬉しそうな顔をしたかを。周りの協力を呼びかけてやっとならに、それに応えてもらったとき、どんなに喜んだかを。熱心な教師や指導者の励ましにより、子供たちがどんなに輝いた顔を見せたかを。若者たちが、ダルファーのような民族対立の問題があることに親の目を向けさせたり、温暖化の問題を解決するよう全国に呼びかける姿を。学校や教会を取り囲み、通りという通りにあふれた人々が、初めて自分の主張を訴える姿を。彼は見ていないのです。

彼には世界が変わるとは思えなかったでしょう。一人の人間が世界を変えられるとは。テッド・ケネディの行いをよく知らなかったのです。

アメリカ人なら誰でも知らず知らずのうちにテッド・ケネディの恩恵を受けているのです。彼がいたからこそ、何百万もの子供たちが病気になる前に医者に診てもらえるようになり、生まれたばかりの子を持つ親が育児休暇を取ることができるようになり

ました。労働者の最低賃金は引き上げられ、残業手当も出るようになり、転職しても健康保険を継続して利用できるようになったのです。職場で差別が撤廃され、障害者も教育や医療を受けられるようになり、雇用の機会も均等になりました。また、教育が改善され、大学に行ける人たちが増えました。

このようにテッド・ケネディが一人の力でたくさんのことを成し遂げ、多くの人々の人生を変えてきたことから、わたしたち一人一人にもそのような力があることがわかります。ケネディ議員が行ってきたことがアメリカの物語を作ってきたのなら、わたしたちも、次の時代の物語を書くことができるのです。わたしたちも彼に続きましょう。

これが、この喜ばしい門出の日にケネディ議員からも、わたしからも、みなさんにもお願いしたいことです。社会に必要な仕事をし、常に正義を求め、夢を次の世代に託していくのです。

二〇〇八年度卒業生のみなさん、卒業おめでとう。どうもありがとうございます。幸運を祈ります。

〔参考文献〕

アンドリュース・アルバネーゼ、ブランドン・トリスラー編『グラデュエーション
デイ 未来を変える二十四のメッセージ』佐々田雅子訳、オディッセイコミュニケーション
ショーンズ、二〇〇七年

- バラク・オバマ「ノックス・カレッジ卒業式演説」『アメリカの黒人演説集』荒このみ編訳、岩波文庫、二〇〇八年、三六八―三八六頁
- ナタリフ・ヘン・テビッド編、シカゴトリビューン編集部『オバマの真実』松島恵之訳、朝日新聞出版、二〇〇九年
- 松本道弘『オバマの本棚 人を動かすことの裏に膨大な読書あり』世界文化社、二〇〇九年
- クリストフ・フォン・マーシャル『ブラック・ケネディ オバマの挑戦』大石りら訳、講談社、二〇〇八年
- ライザ・マンディ『シッシェル・オバマ』清川幸美訳、日本文芸社、二〇〇九年
- Andrew Albanese and Brandon Trissler, eds., *Graduation Day: The Best of America's Commencement Speeches*, New York: William Morrow and Company, 1998.
- Graduation Moments: Wisdom and Inspiration from the Best Commencement Speaker Ever*, Colorado Springs: Honor Books, 2004.
- Neal Boortz, *The Commencement Speech You Need to Hear*, Atlanta: Longstreet Press, 1997.
- Carrie Boyko and Kimberly Colen, *Hold Fast Your Dreams: Twenty Commencement Speeches*, New York: Scholastic Inc., 1996.
- Peter J. Smith, *Onward!: 25 Years of Advice, Exhortation, and Inspiration from America's Best Commencement Speeches*, New York: Scribner, 2000.